

「サントリー天然水の森」の活動



サントリーホールディングス株式会社
サステナビリティ推進部・チーフスペシャリスト
山田 健

サントリーは**天然水**の会社。

いい**天然水**=**地下水**がなければ、ビールも、ウイスキーも、
清涼飲料も、なにひとつつくることが出来ない。

この点が、他の飲料会社とは、際立って異なっている。

良質な**地下水**は、
サントリーという会社の**生命線**。

その生命線の「持続可能性」を守るために
行っている活動が、「**天然水の森**」と名づけた
水源林保全活動。

サントリー天然水の森とは

全国の**工場の水源涵養エリア**で、
地下水を育む力の大きい森を目指して、
森林整備をして行こうという活動。

2003年に設定した「天然水の森 阿蘇」からスタートし、
現在整備している森林の面積は、
全国で約10000ヘクタール。
(ちなみに、東京山手線内は6300ヘクタール)

この面積は、
工場で汲み上げている地下水<森での地下水涵養量
という理念を充分以上に満たしている。

サントリー天然水の森

全国15都府県21箇所 **約10,000ha**



「天然水の森」は、

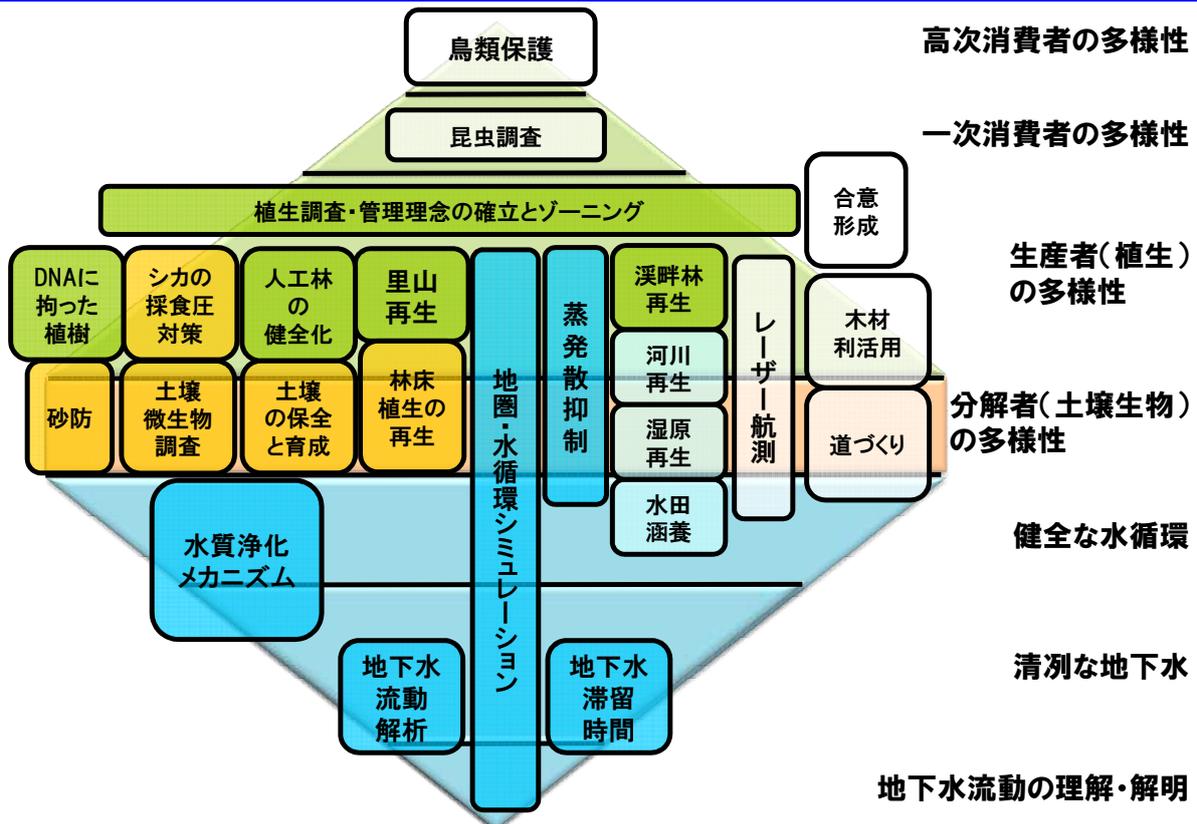
ボランティアやCSRではなく、サントリーの生命線である

「地下水の持続可能性」を守るための**基幹事業**。

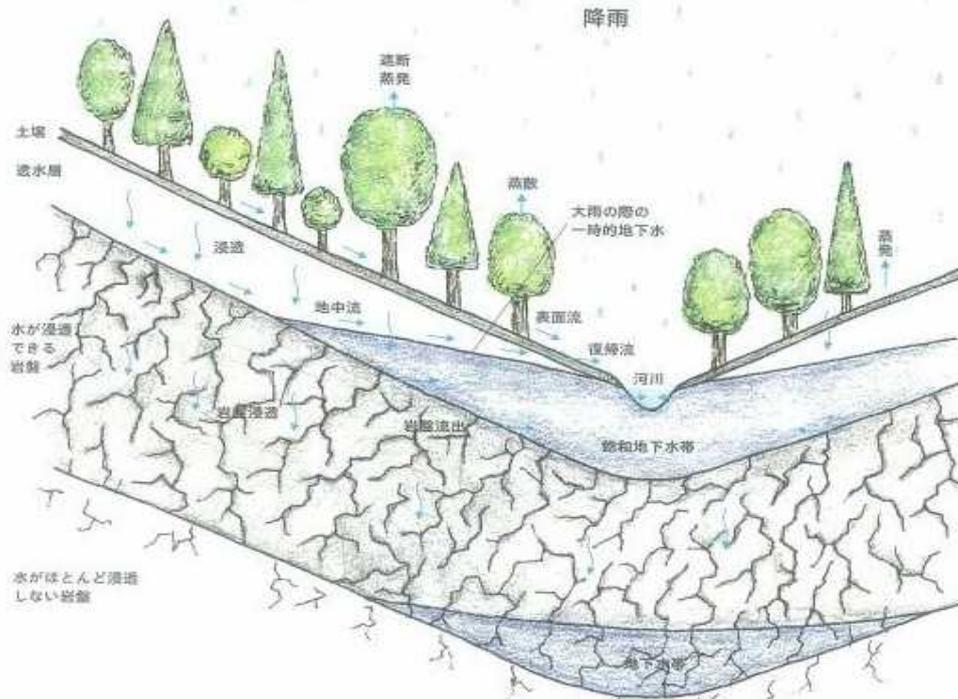
すべての森を大学などの研究機関の演習林的位置づけにし、

調査・研究に基づく**科学的整備**を目指している。

調査・研究の連携



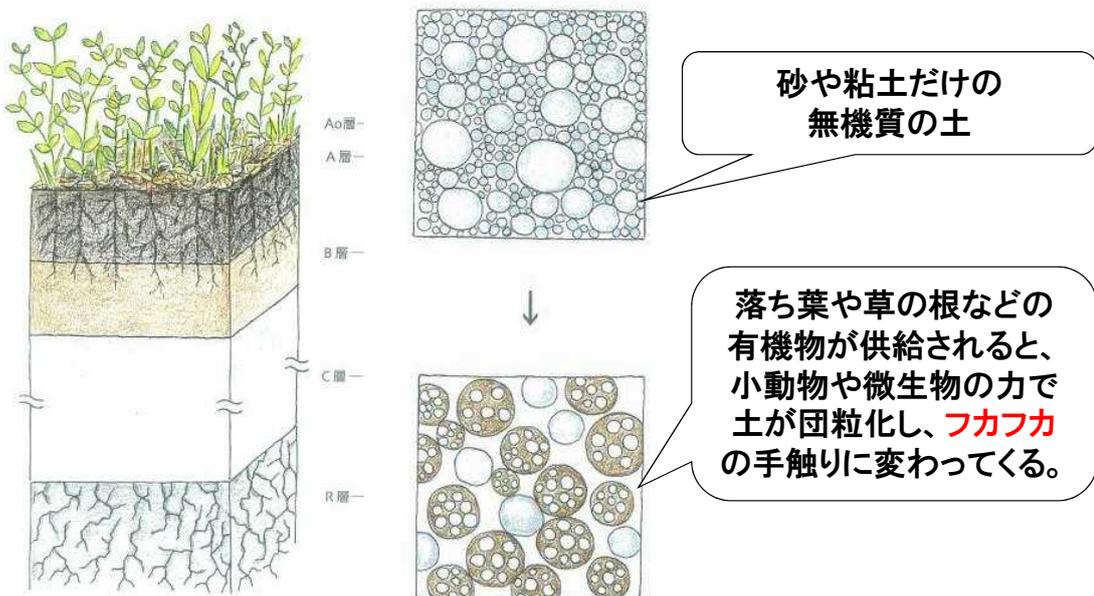
そもそも地下水は、どうやって涵養されているのだろうか？



降雨でもたらされた水が、蒸発や蒸散、表面流などで失われず、大地に浸透していったものが地下水。

7

「天然水の森」の水源涵養活動とは、地下水を育むのに最適な土壌、即ち、有機的な「**団粒構造**」を持つ土づくりが最終目標になります。

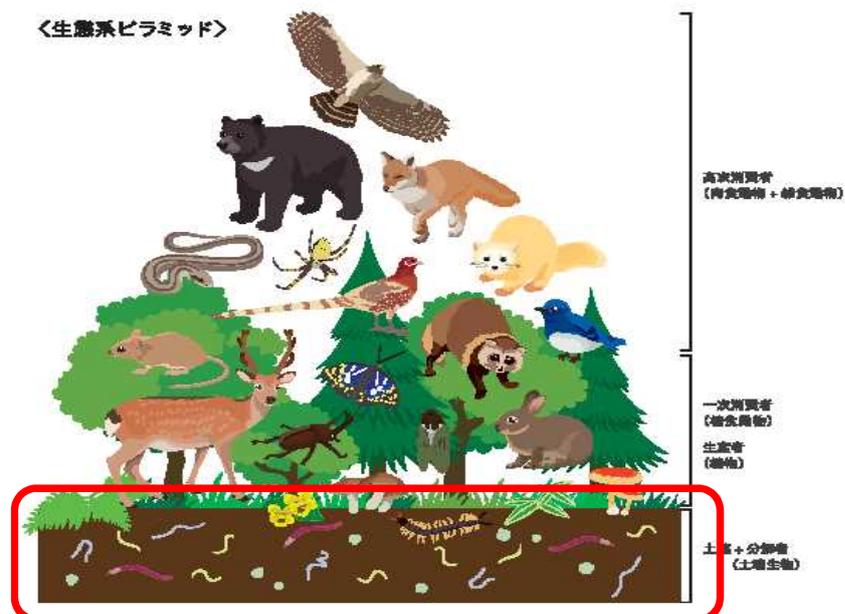


8

大切なのは、森の表面を覆う

土壌を守り、育むこと。

では、どうするか。

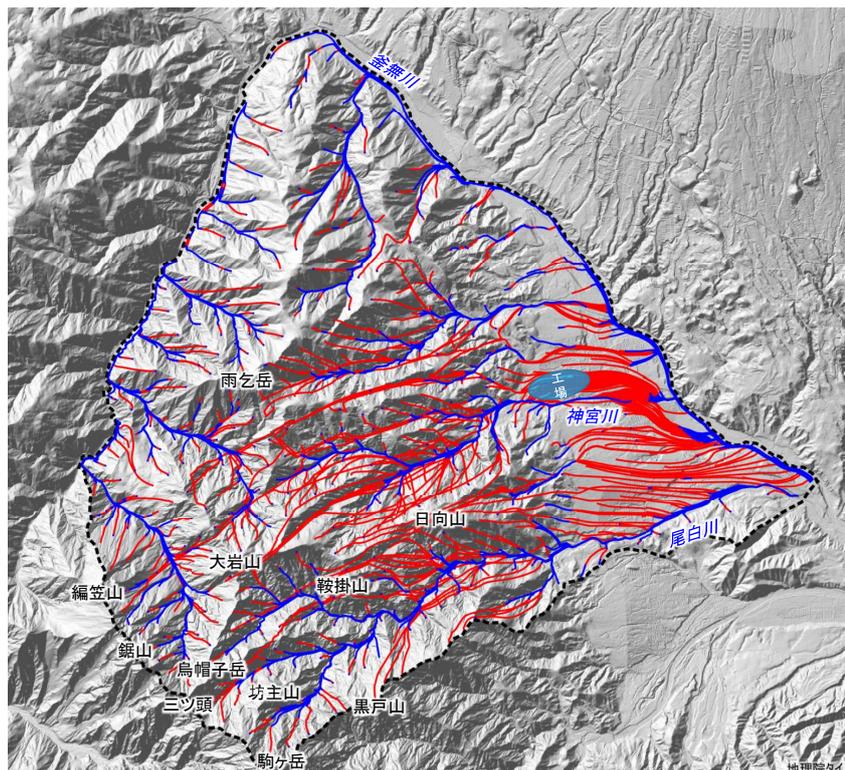


森の生態系の基盤は、**土壌**。

土壌がなくなれば、生態系のすべてが崩壊してしまう。
反対に、森の多様性が失われると、土壌も痩せてしまう。

土壌再生のキーワードは、
生物多様性の復活

地下水の流れを見る研究も重要



調査結果を受けて、整備方針を立案します。

ここでは、具体的な整備活動を、いくつかご紹介しましょう。

整備が遅れた人工林を健全な生産林へ誘導



自然に優しい作業道づくりと、人材育成



地元のDNAにこだわった植樹



地元の小学生と弊社社長が
仲良く記植樹

植樹の際には、地元の樹種に
こだわるだけでなく、
DNAにまで配慮します。
そのためには、**地元での種の採取と
苗木生産**から始めなければなりません。

社員による大植樹祭



種子の採取と苗木の育成



崩壊地の土留め工



鹿等による採食圧への対策



今、日本各地で、**あまりにも増えすぎた鹿が**、草や木の皮を食いつくし、山を荒らしています。土がむき出しになり、土壌流失や崖崩れが始まった箇所も増えてます。



標高1600mのエサ場



植生保護柵の内外では、これほどの差が出る

隣接する林分に侵入し拡大し続ける竹林を元の状態へ



地下茎を伸ばして雑木林に侵入し、次々に木を枯らしながら領土を広げている拡大竹林。各地で生産林や雑木林を脅かしています。

竹の生長は早く、林床に入る光を遮るので、他の植生は育たず、生物多様性を阻害し、地下水を減らし、さらに一斉に「竹枯れ」を起こす性質があり、急斜面では崖崩れの危険性も高めます。



斜面の竹林は、いきなり全伐するとかえって崖崩れの危険性を高めるので、まずはヘクタール3千本ほどに間伐し、広葉樹を植樹します。



なだらかな場所では皆伐して、広葉樹の実生を導入します。

⑤

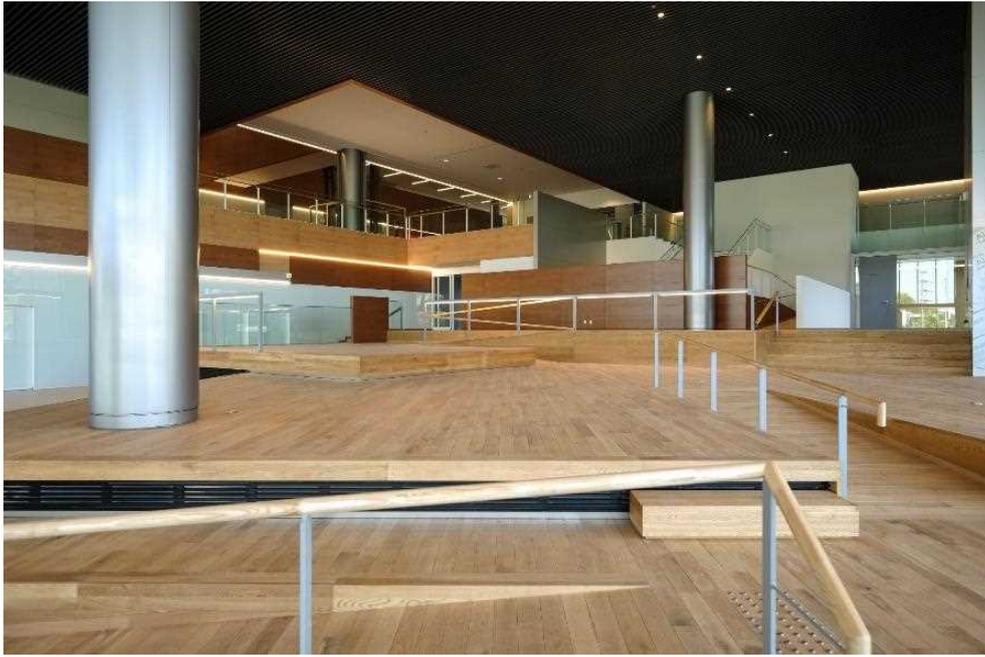
材の利用も大切

サントリーでは、森を健全な状態に育てていくために伐採した材を、通常の「間伐材」と区別して「**育林材**」と呼び、様々な有効活用に取り組んでいます。



例えばこれは、小田原の「ラ・ルース」さんの作品。材は東大秩父演習林産のミズナラ。いったん集成した材を小田原伝統のロクロで挽くという独特の手法。様々な樹種を組み合わせれば、さらに多彩な表情が生まれます。

育林材の利用例



サントリーワールドリサーチセンターの床材 「天然水の森 奥大山」のミズナラ

23

他にも沢山の**研究・整備活動**をしています、

丁度、時間となりました。